

ちゅう せつ ばし

忠節橋

中部地方の 選奨土木遺産

令和元年度登録

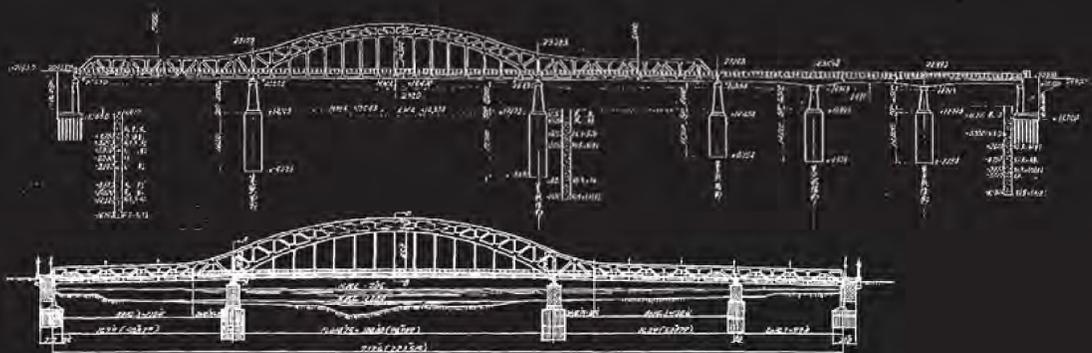
所在地：岐阜県岐阜市

竣工年：1948（昭和23） 管理者：岐阜県

認定理由：郊外から岐阜市街地への重要なアクセス部に、河川大改修と戦争が終結するや否や建設された、象徴的なブレーストリブ・バランストアーチ鋼橋。



長良川右岸下流側からみた忠節橋。独特なフォルムが際立つ。



▲ 忠節橋の設計時の一般図（上）と旭橋の一般図（下）を1/1000スケールに揃えて並置した。アーチ部分は、旭橋より若干小ぶりではあるが、吊材の数に至るまで同形式が選ばれていることがわかる。

忠節橋は、岐阜市のシンボリック的存在となっている。戦後、官民が一丸となって熱意をもって取り組み、全国の復興橋梁に先駆けて竣工した。ブレーストリブ・バランスト・タイドアートという特殊な形式で、東京の白鬚橋（1938）、旭川の旭橋（1932）にしか前例がない。とくに旭橋はフォルムも酷似しているが、旭橋の設計者である吉町太郎一は、忠節橋を設計した岐阜県道路課長の伊藤千代太郎が名古屋高等工業学校の学生時代に同校で教えており、師弟関係が確認できる。架橋時に事務所長松久勉や主任技師の河瀬令二も同校の後輩である。

この忠節橋は戦前から待望されてきた橋だった。1912年に架けられた旧忠節橋は、木造トラスであった。郊外の人々が岐阜市街地へ行き交い、また西部から物資（特に鉄鋼業に欠かせない触媒であった石灰石の需要が高かった）が岐阜駅経由で全国へ運ばれる要の地点であり、1940年前後に頑強な橋への架け替えが進められた。しかし太平洋戦争最中であり、奮闘叶わず実現しなかった。この時に伊藤チームの設計した橋梁は、戦後に県庁内の後輩に引き継がれて完結した。岐阜市政40周年記念事業と併せて竣工し、復興ムードを盛り上げた。



▲ 1948年8月2日竣工式翌日の岐阜タイムズ記事。これによれば、重要関係者が集まる中で、公募による6組の夫婦による渡初式が実施された。夕刻には市政70周年の花火大会も開催され、式典には5万人を超える市民が集まった。



▲ 金華山と忠節橋の風景。西側の郊外から市街地へアクセスする人々はみな、この象徴的風景を迎えられる。



▲ 施工を請負った株式会社横河橋梁製作所が作成した工事功労者の銘板が、左岸アバットの壁面に掲げられている。土木部長 鈴木清一、監理課長 松尾吾策、道路課長 石井謙、所長 松久勉、主任技師 河瀬令二。伊藤千代太郎の名前はなく、伊藤はこの時期、近隣の柳津村の村長を務めている。

